

年三月十日仏印第三次進駐を果たし、さらにはビルマ夏季攻勢作戦へと進軍は続く。

## 湘桂作戦従軍記

静岡県 木村二郎

昭和十八年四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六大將、ブーゲンビル島で撃墜され戦死の悲報を聞いたのは、私達初年兵がまだ中部四八部隊で、南支戦線に派遣されるための基礎教育を受けている時だった。

其の頃、当時の新聞報道は連戦連勝で、国内は歓喜に沸き、戦局全般の推移など私達初年兵に判るはずもなく、降って沸いたこの悲報を、郷里から再度面会に来てくれた母親から聞き、ただならぬ酷しさと緊迫感を知るのだった。

やがて五月末になり、野戦の現地から私達第二中隊の初年兵受領に来ていた松坂・浦岡軍曹の指揮に従い、駆逐艦に護衛された「淡波丸」（二万二千八百トン）

の貨客船、最新鋭船に揺れて十一日間の航海を経て、広東省黄埔港に上陸した。

各隊はそれぞれ分散し、大隊本部は石龍市内、私達第二中隊は本部より五百メートルほど北東の東詰に駐屯した。私達のために設置してくれた鉄道廢舎にひとまず落着く。訓練科目が進み数日の後、一キロほど離れた小高い西湖障地に野営する。ニッパ椰子の葉で屋根を葺き、竹材を組合せた簡素な営舎に入り、少し下った辺りを見渡すと、灌水池付近で野放しの水牛が草を食んでいる。長閑な農村であるとはいえ場所は敵と指呼の間の第一線の原野であり、油断のならない真剣な訓練の毎日だった。

三カ月の擲弾筒の第一期検閲も終り、続いて狙撃手教育の期間中、一等兵に進級、星も二ツになって自他共に嬉しい一端の兵隊となった。そして初めて経験する広九打通作戦（香港・九龍と広東を結ぶ鉄道）に参加、壮絶で悲惨な戦闘を実感したのも秋も深まる十一月下旬だった。

短い十日程の作戦も終り、帰隊すると即、移動命令

があり、石龍市から六十キロほど北東の太平場部落まで自動車輸送、ここに大隊本部がある。私達二中隊はさらに八百メートルほど北東の蟹地部落まで徒歩で行き、駐屯することになった。

古参兵の言うにはこの地は二回目で、以前激戦の地だったと教えられた。移動も完了し、兵舎の補修、草むす宮庭の整備、他の兵員は陣地構築と防備万端、忙しい毎日だった。

明けて昭和十九年、警備に万全を期す中、元旦を迎え、古参兵の作った門松、国旗も掲揚され、暮に搗き上げた餅も各人に少しずつ配られ、楽しい年末年始だった。

梅花も開き、菜の花も咲き、暖かな元旦だった。四日には大隊本部で演芸会も催され、各隊から選抜された芸達者に拍手を送り、ドツと笑わされる場面もあり、戦闘の労苦も吹き飛ばされるような愉快な催しであった。

やがてやって来る九ヵ月間余も続いた「湘桂作戦」の過酷な現実があるなぞとは、下級者の私達には知る

よしもない休養日だった。

三月初め、内地から来た初年兵教育の助手として服飾中、選抜上等兵の一位で申告した時は嬉しかった。

奉公の意志を胸に秘め軍務に精励した。四月中旬になると、予てから噂していた「湘桂作戦」の下令があったが、企画秘匿のため詳細は明示されなかった。

下旬になると作戦に備え猛烈な訓練が行われた。即ち射撃演習、渡河訓練、陣地攻略演習。一方、被服、軍靴の交換、同検査が厳密に行われ、作戦の概略なぞも示された。携帯口糧、弾薬も分配されるようになり全て準備は整った。

六月二十六日、いよいよ「湘桂作戦」の命令が下った。我が西本中隊は尖兵中隊のため、夜間隠密裏に出発した。雨期のためシトシトと降る中、闇は濃い。重裝備の上、水気が滲み込み重いことこの上なしである。戦友の背と鉄帽の白い標識を頼りに歩くのであるが、少し離れると見失う、途中物凄しい雷雨に逢い全身ずぶ濡れとなる。雨は担ぐ擲弾筒や装具から跳び返り、首筋や顔に容赦なく当る。連日の豪雨で小河川は氾濫し、

装具を頭上に上げて胸まで水に漬かり歩くこと再三だった。行く道は泥濘と化し歩行もままならず、七転八倒の難渋だった。

苦闘数日の末早朝、北江の渡河点に迫る。乗船場はサーチライトに照らされて、雨期の北江は濁流渦巻き滔々と流れていた。この日の河巾は二千五百メートルぐらいで、流れる湖のようだ。渡河は工兵隊の先導で進められ、用意された数隻の舟艇に順次分乗行された。無事対岸に着くころ東の空も白み、上陸後は部隊はひたすら山岳に向かう。

足元に陽光が射すころだった。敵米機二機低空で飛来し頭上を旋回する。その内渡河点めがけて爆弾投下、ドドン、パッパッパッと猛烈な閃光と噴煙が高く吹き上げる。敵機は互いに旋回しては機銃掃射を繰り返す。我々の方まで反転しては銃撃する。全員岩影や草の茂みに首を突込み隠蔽するも、低空で来る轟音には身の震えを覚える。執拗な攻撃は二度三度、数分、いな数十分続けられ、頭上を乱舞後ようやく東の方へ飛び去った。すでに渡河を終えていた我々は、心中幸運だっ

たと胸を撫で下ろしたが、被害部隊の安否を気遣った。その後行軍は強行軍となり、遮二無二前者に続き隊列も長蛇になった。小憩してはまた進む、そして空襲には常に神経を使った。このような昼間の空襲のため夜間の行動が多くなった。睡魔も猛烈に襲ってきて、歩きながら眠り、前者につき当り目を醒ますことが度々だった。数日の後、清遠県清遠市の郊外に辿り着き、ここで暫く民家に駐留することになる。

この頃はもう携帯口糧も使い果たし、補給も遅滞し、折から住民不在の二毛作の放置してある稲を刈り取り、旧式の脱穀桶に籾を払い落し、精米には石臼や手廻し扇風機も使い、当座を凌ぐ有様だった。そのころ私はわずらっていた痔病と、マラリヤ病に罹り、衛生兵の勧めと隊長の命令により、野戦病院に下がった。

古ぼけた民家を使用した仮設病棟は、土間に敷藁を敷き、薄暗い中に数人が横臥していた。息も絶え絶えの戦友もいて、その横の空席に横臥した。一夜明けて隣の戦友を気遣い、覗き見て話掛けたら、応答がない。良く見ると既に屍と化していた。忍耐の五日間をここ

で過ごし、ヤンマー発動機船で広東第一陸軍病院に後送され、レントゲン撮影・精密検査を受けた結果、病名は外痔瘻と決められた。二十日後さらに広九鉄道で、香港陸軍病院に転送された。

さすが英国軍が使用していた軍病院で、八階建鉄筋コンクリート造り、多勢の従軍看護婦が快活に働いていた。ここで順番を待つて数日の後執刀、約二ヵ月療養に専念し、軍医に懇請して退院することが出来た。そして広東の練成隊で体力の回復に務め、広東、佛山、三水の要衝の警備に就いた。

当時我が南支軍は、対米戦必至を想定し、広西省梧州より反転していた。私は広東省海豊市で我が中隊と懐かしの合流が出来た。

その後、海岸線の洞窟陣地掘削中の八月十八日、我々にはこの日「終戦の勅語喚発せらる」との命令に依り銃を納めることになり武装解除、集中営捕虜生活数ヵ月を経て、昭和二十一年四月二十三日、浦賀に復員することが出来た。時にポツダム特進の一階級の進級があった。

## 足 跡

神奈川県 岩 淵 清之助

昭和十七年九月七日、第三乙種の私にも召集令状がきて、新潟県村松にある東部第六十八部隊に入隊。仲間は、大正十年生まれの者が多かったたので、現役兵より八か月ぐらい遅れたことになる。三か月間は雨の日も無い猛訓練の明け暮れ、自分の体力の限界まで発揮したつもりである。

軍人精神も全く判らないまま夢中で過ごした村松の教育隊を、十一月には別れを惜しむ気持ちで、一路千葉佐倉の連隊に転属した。佐倉では少々暇もでき、郷里の宮城県からの面会もなかったが、あわただしい日課であった。

十二月、我々の転属組は営庭で何列かに並ばされた。私は何とはなしにある列の後についた。ところが、私の列は南支、大部分の列は中支要員と決められた。軍